

沖繩の藍染料に関する史料紹介(3)  
— 『山藍實用眞書』に見える明治時代前期の琉球藍の動向 —

大湾 ゆかり

Introduction of historical materials on indigo dyes in Okinawa (3)  
— Trends of Ryukyu Indigo in Early Meiji period —

Yukari OWAN

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第17号別刷

2024年3月15日

Reprinted from the  
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.17  
March, 2024



## 沖縄の藍染料に関する史料紹介(3) — 『山藍實用眞書』に見える明治時代前期の琉球藍の動向 —

大湾 ゆかり<sup>1)</sup>

Introduction of historical materials on indigo dyes in Okinawa (3)  
— Trends of Ryukyu Indigo in Early Meiji period —

Yukari OWAN<sup>1)</sup>

### はじめに

「琉球藍」<sup>1)</sup>という藍染料は、琉球王国時代から今日に至るまで沖縄の染織文化を支えてきた染料の一つで、宮古上布や琉球絣などの染織物には欠くことのできない染料である。とくに、紺地の宮古上布は王府の厳しい管理のもと貢納布として生産され、薩摩藩を通じて薩摩上布として全国へ出荷されていた。その原料となるリュウキュウアイ（当時は「山藍」と称した）もまた、薩摩藩の特産品とするため藩外への持ち出しが禁止されていたという[小橋川：2004, 26]。廃藩置県によって薩摩藩の規制が解かれてリュウキュウアイ（山藍）の藩外への持ち出しが可能になると、その存在が広く紹介されるようになり、静岡県や群馬県下でも栽培されるようになったとある[小橋川：2004, 27]。

一方、廃藩置県後の沖縄県は、琉球王国の解体によって職を失った士族が無禄になり、生活の糧を求めて地方へ移り住み帰農した時代であった。彼らの生業の一つが当時換金作物として有用であった琉球藍の製藍業であった。とくに明治30年代には、原料たるリュウキュウアイの生産者は急激に増え、当時の新聞には、その圃場となった本部半島の山々が一時は「筍掃山」と称されるほど開墾が進んでいたことを報じている<sup>2)</sup>。

琉球藍が、無禄士族らによる北部山林地帯を開墾して屋取集落を形成した時代に、換金作物として有望視されたのは、いかなる理由があったのだろうか。

そこで、本稿では、琉球藍の歴史にもっとも詳しい小橋川順市氏の著書『沖縄島々の藍と染織』（2004年発行）<sup>3)</sup>を手掛かりに、1891年（明治24）に発行

された『山藍實用眞書』に注目し紹介してみたい。本書は、1890年（明治23）12月に、静岡県静岡市出身の村松壽策が著作し、三浦擁萬堂から1891年（明治24）1月に出版されたものである。本書の一部は、小橋川氏が前掲書の中で取り上げ、解説しているが、この中に明治維新前後から明治時代前期にリュウキュウアイの栽培や製藍法に興味を持ち、本土での蕃植を試みた人々の動きが記されているので、その記述がある章を抜き出して、まず原文を紹介した後で解説し、その他にも資料を見ながら明治時代前期の琉球藍をとりまく社会背景を見ていこうと思う。

### 1 『山藍實用眞書』の記録

本稿で用いた『山藍實用眞書』<sup>4)</sup>は、国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧できるもので、全体は次の通り十三章からなっている。

- |                |            |
|----------------|------------|
| 第一章 総論         | 第二章 土質選定の事 |
| 第三章 沿革の事       | 第四章 移植成績の事 |
| 第五章 甘藷参考の事     | 第六章 苗株植付の事 |
| 第七章 挿樹法の事      | 第八章 耕耘肥料の事 |
| 第九章 苗株貯蔵法の事    | 第十章 苺採識別の事 |
| 第十一章 製藍法の事     |            |
| 第十二章 還元法則ち建方の事 | 第十三章 結論    |

本稿ではこの中から、琉球藍の沿革と注目を集めた頃の動向について記述がある第一章と第三章を抜き出して紹介したい。なお、本書はもともと縦書きで漢字と平仮名で記されており、書き起こしにあたっては、旧漢字はできる限り新漢字に直し、適宜句点を挿入して表記した。また、振り仮名は、本文の

<sup>1)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

理解が必要な個所のみ表記した。本文中、小文字で記されている文字は（ ）内に記した。

## 山藍實用眞書

有馬藤兵衛校閱

村松壽策 著

### 第一章 総論

工業的植物種類多しと雖も藍ハ其利益最も多く且つ諸染料中殊に貴重なるものとす。故に内国の需用年を逐ふて増進するのみならず其資質の堅牢耐久なるは欧米人の籍々賞賛し措かざる所なり。而して藍に二種あり。蓼藍及び山藍即ち是なり。蓼藍は何れの地方にても多少栽培せざるなしと雖も徳島県阿波国八本場として其名声に著し。夫の山藍の如きハ漸く近年に及んで世人の知る所となれり。然りと雖も鹿児島県下の諸島及び沖縄県琉球国に於てハ往昔より盛んに栽培製造せりと云ふ。就中琉球国名護間切及び本部間切ハ山藍の本場にして其染出する所の薩摩飛白及び薩摩上布（即ち名覇飛白及び先島上布）は夙に貴顕紳士間の服料に供せられ流行の威は品位と興に高し。蓋し山藍の分子は緻密にして一旦繊維に浸透するときハ決して変色或いは退色するの憂なく却て物質をして堅牢耐久ならしむるのみならず其色相も亦愈々憂美の光澤を見はすものなり。琉球地方にては此山藍を唐藍又は大藍と称す。花なく実を結はすして本邦固有の蓼藍とは製造用法より品位に至るまで全く其趣きを異にす。

山藍と蓼藍とは同しく蓼分<sup>ママ</sup>を含むの植物なれども如何にして其異なるやを探求せんに蓼藍は種子より叢生して花を開き実を結ひ而して期年<sup>いちねん</sup>にして枯るゝものとす。山藍は株根より発育し花なく実なく数年間其根株を保つものなり。又蓼藍は特に其葉のみ藍分を含むものなれとも山藍ハ其葉は勿論枝幹に至るまで総て藍分を含めり。

又蓼藍ハ苗代を作り種子を蒔き之を田圃に移植し其繁茂成熟を待ちて苜採り以て天日に干し乾して其葉を揉み而して乾燥葉を製藍室の床上に攤げ口し二十五六回水を濯ぎ水分の作用にて五六十日目に藻<sup>くすも</sup>に製し之を搗て藍玉に製し而して後始めて之れを染料に供す。栽培及び製造染法等実に容易の事業に非らざるなり。製造は製藍家に非らされハ能ハ

す。染方は染業者に非らされは難する所とす。今それ山藍に至ては製造用法共に如斯煩雜困難なるものに非ず。乃ち藍株を栽培しその繁茂成熟を待て藍草を苜り集め生葉を茎と共に直ちに製造に着手す。その製造器は槽又は大桶大瓶を用ひ水と石灰の作用を以て僅に五十四時間内外にて製了し得るものとす。琉球にては婦女子も尚ほ易々の業とす。且つ夫れ山藍は製造用法の容易なる故に自家の用料に供するを得るのみならず太た便利なりとす。その染めんと欲する糸反物に適量の泥藍を出して随意に染むるを得かの琉球及び鹿兒島の諸島にて大抵貧富の別なく各自適宜に泥藍を出して自家染をなすこと盛なり。所謂薩摩飛白薩摩上布等の織物ハ皆婦女子の自染に係るもの巨多にして染業者の手を経る者殆んとあるをなし。

琉球に於て殊に多く山藍を栽培する地方を総して山原と称す如上述の名護間切本部間切は其中に在りて最も盛なりとす。名護本部は相ひ隣接して那覇港を距る二十里許の東にあり丘陵起伏山林多くして田園稀なり。地質は一般赤粘土又は石灰地とす。其山藍を栽培する場所を見るに本部間切は概ね山谷林間の肥沃なる開墾地に植ゆると雖も名護間切ハ普通の田園に栽培せり。此田園に培養するものは牛馬野羊の厩肥を施しその山谷林間の開拓地に於ける者ハ他に肥料を施すことなし。故に名護産と本部産とハ品位に優劣あるを免れず。蓋し名護本部は琉球に於て山藍の本場と称す由縁なきに非らざるなり。

山藍の収穫ハ他の諸植物と同じく地味の沃瘠肥料の有無栽培の善悪により必ず多少の差なきこと能はずと雖も今茲に琉球本場の収穫を験するに平均壺畝歩として一年間の収穫無肥料なるも山谷林間の新墾地にして地味肥沃なれハ生葉及び茎とも四百五十斤（壺六）之を製して泥藍四十五斤（壺六）を得へし。又有肥料にて善良なる田園に培養すれハ生葉及び茎共九百斤（壺六）之を製して泥藍九十斤（壺六）を得へし。則ち良田園壺畝歩一年間の収穫泥藍一斤代価拾銭として筭を立てるも金九円となる。其内肥料耕耘及び製造諸費を三円と積り差引六円の純益ありとす。又山谷林間の新開地壺畝歩一年間の収益一斤代価八銭として金三円六十銭となる。其内耕耘及び製造諸費とも一円六十銭と積り尚ほ二円の純益あるを見る。

上乘の如く最も利益多きものなれば須らく農家の培養すべき植物なるを明知せり。然れども独た遺憾なるハ琉球農夫の怠惰にして採耕に精進するの氣象に乏し。故に今僅かに名覇飛白先島上布の染料に供給するに止まる。内地多数の需用者あるも之れに応する能はさるの現況なれば製藍を以て販路の望を海外の市場に発するハ抑も幾春秋の後ならん。

### 第三章 沿革の事

山藍は琉球の特有産にして内地ハ未だ一般移植伝播を見ざれども独り鹿児島県下諸島は往昔より播殖す。其栽培の盛なるを琉球に次げりと云ふ。予鹿児島に遊び有馬藤兵衛氏に就き山藍の由来を質したり。氏ハ元鹿児島藩士にして鹿児島藩政の頃ハ鹿児島藩生産局奉行藍玉所係を勤むる数年なりき廢藩置県の変革あるに方り鹿児島県勸業課出仕に任せられ製藍局長となる。明治十年に至り退職す。即ち山藍の事業に於ては精濟其奥くわしくを究め緻密其理こまかくを探究し製藍の技術は尤も長とする所なり。今年齡七十有余に及び製藍の事業尚ほ廢せず故を以て其名声実業界に高し。氏の説に曰く山藍にして琉球山藍と呼ぶもの多しと雖も山藍ハ固と琉球初來の通稱に非す。慶応元丑年山藍の再起するの際山辺に栽培して繁茂するもの多きを以て蓼藍と混沓こんたうせざるため茲に山藍の命稱を附したるは則ち予輩にして彼琉球に在てハ曾て山藍と呼ぶ者なし。唯た藍と云ひ唐藍或は大藍と稱するのみ。往古其種子琉球より移植せし起原を明尋する能ハされとも琉球の元産たることは疑ふ可あらざる事実なり。我薩摩の古方言に総て之を唐藍と呼ぶ。諸島にても亦然り。想ふに琉球は支那と交通を開き相往來せしを以て或は支那及び印度より種子の舶來せしものならん歟。唐土の古書に蜀藍と云ふものあり。蓋し其国又は所在に依て名稱を異にするものなりと雖も大藍と呼ぶは乃ち其実稱ほんとのななり。又泥藍を薩摩の古方言には藍蠟あいろうと呼ぶ。泥藍とハ慶応元丑年予輩の附したる号稱なり。其際同僚に異論するものありて泥藍の文字を非難す。予曰く金粉にして畫工の用ゆるものを金泥と云ふ。藍にして泥の文字を用ふる何の不可か之れあらん。且つ容子泥かたちなるを以て泥藍の名稱最も可ならずやと乃ち斯く泥藍と呼ぶ事になれり。然れども此義を知らざるもの泥藍を以て下等品と見る者多し。故に之を避けんと欲

し水藍と云ひ精藍せいあいと云ふ。今は琉球にても泥藍と稱するもの多しと雖も其種類素より同日の談にあらす上來の如くんは山藍泥藍の名稱有馬氏より出て遂に一般の通稱とはなれり。

抑も山藍は往昔より薩摩大隅の諸島には蕃殖したるものなれば鹿児島藩政の頃は生産局製藍所と稱する製藍一切の業務を掌る役所を設け奉行やくにんを置き以て製藍を監理し専ら業規を盛大にすと雖も輸出は藩政の嚴禁する所なるを以て藩内の需用に供するのみなりき。因に記す。藍玉所の建築に係る製藍所ハ現に大隅国肝属郡佐多伊佐敷に存在し製藍の用に供す有馬藤兵衛氏之を経営し盛にその業を為せり。

山藍の畜に鹿児島県下に蕃殖して他県下に移植伝播せざりしハ一に琉球航海の不便且つ鹿児島藩政の強硬にして他地方に移植するを禁せしに由縁せり。是故に往時山藍と稱する一種の藍草を知るものは他地方にあらざりし明治維新以降漸く此弊を脱すると同時に汽船の交通初て自由を得しを以て移植伝播の端を開きしは即ち明治八年八月鹿児島県の人儀永吉助氏の山藍栽培法の事を記し東京報知新聞に投せしより天下の人之を知ることにハなれり。當時静岡県駿河国駿東郡富岡村大畑の人高橋次郎氏ハ此記事を閱するや山藍移植の志望を開発し直に鹿児島に至り実境を探れり。今其顛末を質する高橋氏曰く予か藍靛製造に着手したるは抑も明治六年の頃なりき東京工部省に於て宇都宮三郎君か原書により模造せしもの之を旧勸農局に移す。當時局員町田実則宮里正静の両氏之を担任せしとき予も參て従事せり。是より先き山藍なるものは鹿児島の特有産なるを聞き其種苗を得て栽培製造を試みんと欲し同県又は琉球の人に依頼せしも未だ時の至さるか素志を遂る能はず。荏苒八年に及び会々磯永吉助氏の山藍栽培の事を全年八月報知新聞に投書せしを閱す。於此乎予は蹴然鹿児島に渡航し当時県令大山君に就き有馬藤兵衛氏に紹介を請ひ始めて山藍の栽培地を視察し而して勸業出張所に於て山藍を製造し試業を卒る。其得志帰するの日に当り苗木百株余を携帯せり。爾來苗木を村中極めて温暖な地に囲い置き翌春八十八夜の頃田圃に植付試作し(有馬氏の指教に従ふ)独り奈何せん苗木僅少なるを以て製造に供する程の収穫を得ず。故に苗木の繁殖に枯据従事し漸く明治十年に至り従前より培養しつつある蓼藍と山藍の兩種を資と

し駿東郡佐野村に製藍場を設け藍靛を製造し有益なる植物なることを実験せり（此製造藍靛は当時博覧会に出品して三等賞を得たり）。既に山藍の斯く有益の植物と確信する以上は我一地方にのみ培養すべき者にあらされは全年故足柄県令柏木忠俊君に稟談する所あり。豆州那賀郡大澤村（当時区長）依田佐二平氏に数株を分与し栽培せしむ。同氏頻りに挿樹を為して繁殖頗る其効を奏し三年の星霜を経て数万株に及ひたれば之を有志に分ち多衆の培養する所となれり。是れを豆州に山藍移植の<sup>はじめ</sup>嚆矢とす。則ち山藍は豆州に適當なる植物なるを信認すれとも一般の農民は積来の習慣破り難く免角疑相半ばし栽植に躊躇するの際全郡松崎村の染業者中村伊八氏は普通製藍玉にして試みたるに藍質優美にして蓼藍に勝る<sup>よほど</sup>数等と云ふへし。氏大に山藍の栽培製造の蘊奥を究めんとを希欲し十一年鹿兒島に渡航し有馬氏に就き質疑対問すると茲に三十余日苗株一万六千本を携へ販りしも舶載転投数日を経過せしを以て其過半強を腐敗す。乃ち生存したる残株を依田氏に委任し大に有志に分け移植せしむ。翌十三年全郡市ノ瀬村山本鎌吾氏の栽培に係る山藍と依田氏の分を合せて製造し十分の結果を得たり（十四年博覧会に出品し賞状を賜はる）。爾来愈々栽培に従事し製造事業に余念なしと云ふ。実に本県下に於て山藍移植の開基はそれ高橋次郎氏なる乎次て明治十九年の頃遠州の浜松の人森田伊惣次氏其他二三の商人琉球に渡航し山藍の栽培を実視し有益の植物なるを感じ苗木を輸入販売し今や駿遠三尾の諸州に波及培養するに至れり。然れども爾来栽培製造染業等の規模を開発するの<sup>ひと</sup>人士なく故に一ひ苗株を需め栽培するも製造染方の実験なきを以て其利を獲す近<sup>ほうてん</sup>殆と暴<sup>ほうてん</sup>傾せし傾向ありしか。本年七月に至り遠州掛川町農学社の高島甚三郎氏及ひ見附町報徳館の伊藤七郎平氏有志を叫会し報徳館に於て山藍製造及ひ染方を試験し称々栽培の規模を拡張するに至れり。蓋し山藍の移植は高橋森田其他二三の諸氏<sup>はじめ</sup>之か<sup>はじめ</sup>槐首をなすと雖も製藍方及ひ染方に至りては未だ曾て其伝を得ず。故に山藍の全益を知る能はず動もすれハ世に排斥せられんとするを<sup>まぬか</sup>道れざるの勢あるを憂ひ茲に明治廿二年五月予ハ鹿兒島に業遊し地勢土質及ひ培養の模様を視察し尚ほ鹿兒島県人にして藍靛製造の技術に長せる宮里正静君及ひ実業大家有馬藤兵

衛君に就て製藍法を研究し又其他の諸氏と謀り製藍の業を起し自ら之に従事<sup>し</sup>験理し始めて山藍製の藍靛は其美質の優なること西来の藍靛より遙に高尚にして価格も亦廉なること殆んと三分一にも当らざるを信知す。依て之を全国に播殖し盛大に産出するに至れば益々価格不廉にして且つ下等品なる西来藍靛の輸入を防くと同時に欧米の市場に向て本邦生産の藍靛を輸出するの美事を挙ぐる事難き<sup>し</sup>にあらざるを知らざらん。乃ち廿二年十二月帰国有志を会し蕃殖の事業を誘説するも一ひ農民の信用を失落したるは容易に挽回するの難きを以て自ら実業に就き卒先其利益を宣揚するに如かざるを知り廿三年三月静岡染工会社を経営し染業を開き従事する数月にして其結果の蔽ふ可からざる。漸く世人の疑惑を解き山藍ハ工業的植物中利益の最も多きことを信せしむるを得たるは漸く染業を中止し更に鹿兒島の人にして実験家堤稍氏と共に栽培法製造法染方法の伝習<sup>し</sup>を<sup>し</sup>企業するや染法各地に延及し栽培亦旺盛に起くの祥氣を見るに至れり。

## 2 『山藍實用眞書』に見える琉球藍の動向

### (1) 山藍<sup>7</sup>と蓼藍の比較

第一章総論では、国内の藍染料の需要が年々増えている中、山藍と蓼藍（阿波藍）の二種類について栽培や製造法等を比較した内容がみられる。

まず注目したいのが、「夫の山藍の如きハ漸く近年に及んで世人の知る所となれり然りと雖も鹿兒島県下の諸島及び沖縄県琉球国に於てハ往昔より盛んに栽培製造せりと云ふ」という記述である。すなわち、近年（明治20年頃）ようやく山藍が全国に知れ渡ったが、鹿兒島県下の諸島や沖縄県では往昔より盛んに栽培製造していたことにふれている点である。その理由は、後述の通り山藍の「輸出は藩政の厳禁する所なるを以て藩内の需要に供するのみ」であったため、本土では琉球藍の存在が知られていなかったからである。

次に、山藍は薩摩飛白や薩摩上布に用いられ、堅牢耐久に富み優美な光沢をはなち、蓼藍とは製造用法から品位に至るまで趣が違うとの説明がある。そして次の点で山藍の優位性を示している（表1）。

表1 山藍と蓼藍の比較

	山藍	蓼藍
植生	数年間株を保つ	一年草で毎年枯れる
藍分	葉から枝幹まで全て含む	葉のみ
栽培	株分け	苗代を作り種子から栽培
製造	収穫したら槽または大桶大瓶を用いて水と石灰の作用で54時間内外で製了する。婦女子でも製造できるほど容易	収穫したら天日干し、乾燥葉を床に拡げて25、26回水をうち染にするまで50～60日、これを搗いて藍玉にする。製藍家でないと困難
染方	貧富の別なく自家染が盛ん	染業者でないと困難

このように、山藍すなわちリュウキュウアイはタデアイに比して栽培の労も少なく、また収穫した葉を染にするまでに長い期間かかる蓼藍に対して、短時間で染料化できる琉球藍を優位に評していることがわかる。

### (2) 沖縄県内の栽培地と利益の展望

つぎに山藍の栽培地について述べている。それによると、山藍は名護間切と本部間切で最も盛んで、本部間切は山間部の肥沃な開墾地に栽培するが、名護間切では普通の田園に栽培するので牛馬山羊の厩肥を施す必要がある。さらに、山間部の新開地の一年間の収量が450斤、これを製して泥藍45斤、有肥料にて良い田園で栽培すれば900斤、これを製して90斤を製し、前者の純益が2円に対し、後者は6円あると記している。

この後、著者の村松は、「最も利益多きものなれば須らく農家の培養すへき植物なるを明知せり然れとも独た遺憾なるハ琉球農夫の怠惰にして採耕に精進するの氣象に乏し」と述べ、このように利益が大きいので作物として周知すべきだが、如何せん沖縄の農夫は怠惰で農耕に精進する気性に乏しいと指摘。本土に多数の需用があるのに、県内の那覇飛白や先島上布の染料供給に留まっていることを憂いている。

以上の内容からすると、明治20年代初め頃は名護間切や本部間切でリュウキュウアイの栽培が盛ん

になっているが、まだ県内への供給のみで、県外へ輸出できるほどではなかったように読み取れる。

### (3) 有馬藤兵衛の山藍事業

つぎに第三章沿革の事の項で説明されている、明治期前半の山藍をめぐる動向について解説したい。まずは、本書の校閲者でもある有馬藤兵衛という人物の業についてである。有馬藤兵衛は、元薩摩藩士で薩摩藩生産局奉行藍玉所係として数年勤め、廃藩置県にあたり鹿児島県勸業課出仕に任ぜられ製藍局長となった人物である。著者の村松は、1989年(明治22)に鹿児島へ行き、有馬に山藍の由来等を聞いている。その内容を整理すると、次の通りである。

①「山藍」の名称は、蓼藍と混同しないよう有馬が名付けたもの。琉球では「山藍」とは言わず、「藍」又は「唐藍」「大藍」と称するのみ。薩摩の古方言でも全て「唐藍」と呼ぶ。

②「泥藍」という名称は、1865年(慶応元)に有馬自身が名付けたもの。同僚には批難されたが、有馬は絵画に用いる金粉を「金泥」というから何の不都合があろうかといひ、容姿からも「泥藍」が最適であるとした。しかし、泥藍の名称は下等品と見る人も多く、これを避けるため「水藍」「精藍」とも称された。因みに薩摩の古方言では「藍蠟あいろう」という。

③山藍は往昔より薩摩大隅に蕃植し、薩摩藩政の頃は生産局製藍所という製藍一切の業務を掌る役所において製藍を監理し盛大であったが、輸出は厳禁で藩内の需要に供するのみであった。

④山藍が(沖縄・鹿児島以外の)他県下に移植伝播しなかった理由は、琉球航海の不便と薩摩藩政によって他地方への移植を強硬に禁じたからである。

以上の通り、本書には琉球藍が薩摩藩士で製藍を監理していた有馬藤兵衛によって「山藍」「泥藍」と名付けられたことや、廃藩置県以前まで薩摩藩の政策によってリュウキュウアイの持ち出しが禁じられていたことが記されている。これについて、小橋川氏は前掲書で「泥藍を琉球染織品の個性づけに利用したことは前向きに評価できる一面もあるが、原料を藩内の狭い範囲に固定化させたことは琉球藍の発展性を阻害したとも考えられる」といひ、「消費地を全国規模に据えて産業振興すべきではなかったか」と述べている[小橋川：2004, 27]。

#### (4) 明治維新以降の琉球藍の動向

明治維新により薩摩藩の規制が解かれた後、琉球藍は全国に紹介され、これに関心を持った人々によって山藍を移植するための方法や製藍法について調査、研究がなされるようになった。本書には静岡県下で山藍の移植を広めた人々の動向が記されている。

まず、1875年(明治8)8月、鹿児島県人の礒永吉助が山藍栽培法の事を東京報知新聞に投降した。それを閲覧した静岡県駿河国東部富岡村大畑<sup>8</sup>の高橋次郎が鹿児島に渡航し、有馬藤兵衛に会い初めて山藍の栽培地を視察。勤業出張所において山藍の製藍を試し、帰県の折に苗木百株を持ち帰った。高橋は、1873年(明治6)頃から東京工部省において藍靛の製造に着手。その前から山藍が鹿児島特産であると聞いてその種苗を得て栽培製造を試みようとした人物であった。

高橋は、持ち帰った苗木を村中の温暖な地に植えた。1877年(明治10)、栽培した山藍だけでは収量が不足したので蓼藍も一緒にして藍靛の製造を実験し、第一回博覧会<sup>9</sup>に出品して三等賞を得た。その結果をもって山藍は有益な植物と確信し、他の地方にも広めようと足利県令の柏木忠俊に相談。豆州那須郡大澤村<sup>10</sup>の依田佐仁平に数株分けて栽培。その後も株分けして3年後には数万株になった。これが豆州に山藍を移植した先駆けである。同郡松崎村<sup>11</sup>の染業者、中村伊八がこれを藍玉に仕立てた結果、藍質優美にして蓼藍にも勝った。中村は1878年(明治11)、鹿児島に渡航し有馬藤兵衛に会って調査し、苗木1万6千本を舶載して帰郷したが、数日経過してその半数が腐敗。残りの株を依田氏に委任して移植した。1880年(明治13)、同郡市ノ瀬村<sup>12</sup>山本鎌吾と依田の栽培分を合せて製造し十分な結果を得、第二回博覧会<sup>13</sup>に出品して賞状を貰った。

1886年(明治19)頃、遠州浜松の人、森田伊惣次そのほか2、3人が沖縄に渡航し、山藍の栽培を視察して苗木を輸入販売し、静岡県下各州に広めた。しかし、製造染方の技術がなく、1890年(明治23)7月、遠州掛川町農学社の高島甚三郎と見附町報徳館の伊藤七郎米らが集まって製藍と染方の試験をした。

著者の村松は、1889年(明治22)5月、鹿児島に渡航し、地勢土質及び培養の様態を視察。藍靛製

造の技術者である宮里正静と有馬藤兵衛に会い、製藍法を研究した。同年12月に帰国し山藍の蕃植事業を誘説するも信用を得ず、自ら静岡染工会社を興して数カ月で結果を出し、ようやく一般の人にも山藍が工業的植物の中でも利益が大きいことを信知させた。これより染業は中止して栽培法と製造法染方法を伝習する企業を立ち上げ、山藍を波及させようと祥氣をみている。

以上、第三章の内容について述べた。この中で、山藍を最初に全国に紹介したのは鹿児島県人の礒永吉助であり、これを機に山藍を有益な植物と見た高橋次郎をはじめ多くの静岡県人が鹿児島を訪れ、有馬藤兵衛ら会って山藍の苗木を移植し、栽培や製藍に着手したことがわかった。静岡県の栽培地は、主に現在の伊豆半島辺りであることも読み取れる。

このように、明治初期に琉球藍が全国に紹介されて以来その需要に火が付き、本土から鹿児島や沖縄を訪れて調査・研究が始まったことがわかる。

### 3 19世紀頃の世界や日本における藍をめぐる情勢

ここまで『山藍實用眞書』から明治20年頃までの琉球藍の動向について述べたが、本項では、19世紀における藍染料をとりまく世界や日本の情勢について、いくつかの資料を用いて概観してみる。

#### (1) 世界の情勢

19世紀の世界の藍の動向については、中里成章氏が1981年に著した「ベンガル藍一揆をめぐる(1)ーイギリス植民地主義とベンガル農民ー」の論文<sup>14</sup>を参考にした。ここで特筆すべきは、18世紀以降のヨーロッパ諸国と植民地の問題である。18世紀、産業革命によって繊維産業が発達したことで藍染料への需要も拡大し、ヨーロッパ諸国はその供給先を植民地に求めていった。中でもイギリスは、18世紀末にインドのベンガル地方において植民地支配による藍の生産を開始した。ベンガルの藍業は、送金手段の確保を目的として東インド会社のイニシアチブの下に18世紀末に導入されたもので、後に代理商会がこれを引き継ぎ、その発展の重要な基盤となり、イギリス系商社によるインド経済支配の基礎を据える一端となった。しかし、1830年代以降植民地体制に生じた変動が、藍業の地位も低下させその経営

基盤を不安定にした [中里：1981, 145]。このような藍業斜陽化を背景に藍作農民が反抗して、1859年～62年にかけてベンガル藍一揆が起こった。

一方、1856年にはイギリスのパーキンがコールタールからふじ色のアニリン染料（合成染料）を発明し、続いて1869年（明治2）にパーキンとBASF社のカーロラによって茜の色素アリザニンが合成された<sup>15</sup>。天然染料が人造染料に代わる最も大きな影響を与えたのが、1880年（明治13）にドイツのバイヤーがインディゴの合成に成功したことであった。これより人造染料が天然染料を席卷する時代に入った。

## （2）日本の情勢

日本については、三瓶孝子氏著の「本邦製藍業に関する若干の歴史的研究（一）」<sup>16</sup>と宮本又次氏著『五代友厚伝』<sup>17</sup>を参考にして述べる。

日本では、江戸時代に木綿の栽培が盛んになり、藍は木綿によく染まることから庶民にも広く普及した。本土で利用された植物はタデアイであり、徳島ではこれを「薬」加工して阿波藍と称して全国に出荷し、長きにわたって藍の一大産地として君臨した。

1867年（明治元）、日本にアニリン染料が輸入され天然藍よりも安価にして染色美しい染料であるとして、京都西陣等では競ってこれを使用した。しかし、アニリン染料は褪色しやすかったため、1874年（明治8）には化学染料染め（舎蜜染）<sup>ケミー</sup>の流行に対する取締りが叫ばれ、アニリン染料の流行は止まった [三瓶：1943, 45]。

一方、幕末開港によってインドの天然藍も輸入され、良質安価な藍染料として、日本の製藍業を脅かすほどの強敵となった [三瓶：1940, 44-45]。

1872年（明治5）、大蔵省達「田畑勝手の儀已に去辛八月御許有之儀」並びに「農業の傍、商業を相営み候禁止致候向も有之候處自分勝手たるべし」の布告を以て一切が解放されたため、製藍業においても製造売買ともに自由となった。江戸時代は蜂須賀家の保護の下栄えていた阿波藍も、株仲間が解散され、粗製濫造・乱売の弊に陥り、大阪市場への進出を図ったが大阪の藍問屋とも不調となった [宮本：1981, 267]。

そうした中、1873年（明治6）、薩摩出身の実業家として名を成した五代友厚は、国産の藍がインド

産のものに圧せられるのを憂い、ヨーロッパの藍精製法の導入に着手し、阿波藍を原料とした精製藍（すなわち沈殿藍）の研究に取り組んだ。そして1876年（明治9）、大阪に精藍所西朝陽館を設立。徳島県内の工場でアイ葉を買い上げて半製品にし、大阪で最終工程を行うことにした [宮本：1981, 278]。五代は自ら『精製藍染業須知』<sup>18</sup>を著し、藍染業の販路拡大にかけて従業員300人で蒸気機関を動力とする最新設備を導入して操業するとともに、技術普及のための研修も度々行った。

前述の『精製藍染業須知』は、近代の染色関係の文献としては2番目に発刊され [宮本：1981, 278]、化学の目線で染色技法を伝える貴重な資料であるので、冒頭部分を紹介したい。なお、本書の原文は漢字とカタカナであるが、本稿では旧漢字を新漢字にカタカナを平仮名に改めて表記とした。本文の理解に必要な個所のみ表記した。本文中、小文字で記されている文字は（ ）内に記した。

## 『精製藍染業須知』

明治十年丑二月出版 鹿兒島士族 五代友厚  
東朝陽館（東京三田綱町壹番地）  
西朝陽館（大坂堂島濱通二丁目田蓑橋北詰）

## 冒頭部分

吾朝陽館に用ゆる<sup>せいせいあい</sup>精製藍<sup>そめかた</sup>の染法に於る即ち<sup>せいようアメリカ</sup>欧米各国普通の良法にして固より自己の発明に非ず。然れども我内国従来慣習に抛り多少之か工夫を加へ以て其<sup>ケミー</sup>法方を擬定せり。原来藍の水に溶解するや即ち<sup>ケミー</sup>舎密の<sup>やくそく</sup>理約に則るものにして其用ゆる所の石灰硫酸鉄の相和合する所以なり。蓋し石灰を水に溶き之に硫酸鉄水を加ふる時は硫酸鉄中に含有する硫酸分は石灰と親和して瞬時に消失し其有余する所の鉄分藍の酸素（元素の一種）を奪ふ故に其藍分固有の元素を変じて水に溶解し以て透明なる黄褐色の水に化す（但し藍は水に溶解すといへども其実水に溶解するに非ず。アルカリ質即ち石灰水に溶解するなり）。此に因て正に適宜の染業を為し得べきなり。抑藍の染物に適用するは則ち元素の結合より其分量を定むる者にして今此精製藍に於る彼の従来慣用する所の<sup>ケミー</sup>薬藍玉の如き溶解充分ならざるより染布の高を減少し或いは時々腐廢に属し意外の失算を生ずる等の大障害

は決して有ることなしと雖ども連日染業の際取扱ひの粗漏より其効益を損減すること亦無しと為さず。故に意を左の条款に注ぎ其業を務むるときは過失に陥ることなくして効益も亦大なる可し。因て其取扱ひの要件を略記して茲に開列す。

五代はこの本で、精製藍を用いた染色技法について、第一款から第十八款まで、材料や道具、薬品の分量や染方まで詳しく記している。最後の第十八款では、染業の技術取得は口伝だけでは難しいから、東京大阪の朝陽館で20日間染色伝習することを勧め、精製藍の製造技術を広めることに利があることを説いている。実際に伝習所は東京とその近郊、関西は尾州、江州、西京、大阪、阿洲、筑前において教授出張所を設けられたという[宮本：1981, 277]。このように、明治の10年頃には、沈殿法の技術が本土各地でも伝習され、広められていたのだが、その原料はタデアイであった。

これ以降、日本本土においても、藍染料は国民経済の発達や生活の一般的向上によって需要を伸ばし、また農業技術の発達によって葉藍収穫高も増加したので、明治30年代まで生産を拡大した模様である。

しかし、1897年(明治30)、人造藍インディゴ・ピュアBASFが輸入され、1899年(明治32)にはインディゴ・MLBがドイツから輸入されると、天然藍の需要も減少の一途を辿ったのであった。

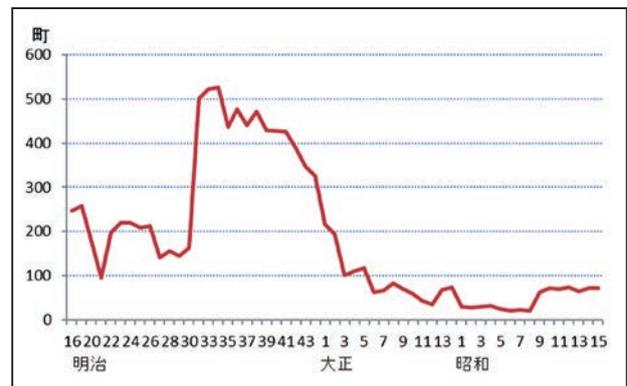
### (3) 明治時代中期の沖縄の情勢

明治時代初期、廃藩置県前後の琉球藍に関する記録は、未だ発見することができていない。小橋川順市氏は、前掲書の中で『伊豆味誌』(兼次佐一著)に記載されている明治16年の統計数値をあげて検証している。それによると、山藍(リュウキュウアイ)は沖縄島全域で栽培され、作付面積も93,912坪と「現在の状況からは想像もつかないような数値である」と指摘。「西原町や浦添市まで藍草の栽培が行われているのは驚き」と述べている[小橋川：2004, 36-39]。この統計の正確性については疑問もあるが、当時の琉球藍の生産について知りえる史料であることは間違いない。

また、1976年発行の『沖縄織物の研究』(田中俊雄・玲子著)の中で田中氏は、明治18年の『日本

山林副産物製造法』(今川肅著)に、沖縄県下での琉球藍の製藍法の記述<sup>19</sup>があり、明治28年の『染色法』(高松豊吉著)にも山藍の栽培から製造までの方法<sup>20</sup>が報告されていることを紹介している[田中：1976, 125]。

下のグラフは、『沖縄県統計書』<sup>21</sup>等からアイ葉の作付け反別をグラフ化したものである。それによると、明治30年代まで山藍の作付け面積は急上昇し、泥藍の生産高もあがっている。それからほどなくして明治40年代には急激に減少したことがわかる。



グラフ1 明治16年～昭和15年のリュウキュウアイ作付け反別

このことは、印度藍や人造染料の流入が天然藍に大きな打撃を与え、琉球藍もその影響を受けて衰退していったことを示している。そこで最後に、当時の新聞記事から琉球藍(山藍と泥藍)の状況を確認しておこう。

### 1898年(明治31)4月9日 琉球新報(一面)

#### ●大阪所見(九)

「(2)反布類 本類の輸出は固と鹿児島市のみ限り未た本市に輸送するに至らず専ら鹿児島商人の手を経て各地に販出せしに由り其名声も従て薩摩飛白の名称を受け嘗て其産地の本県たるを予想せざりか如し。然るに廃藩置県以来交通の便漸く開けて商業<sup>ママ</sup>消や発達するに従ひ漸次本県商人の手に依り販路を拡張して遂に本市に輸送するを得るに至りぬ。故に現今に至りてハ其生産力も非常に増進して本市に輸送するもの年々凡そ紺飛白百六万反内外にして紺細上布白細上布久米紬白地布鼠布芭蕉布等合して二万四五千反以上にと云ふ。(以下略)」

1898年(明治31) 4月15日 琉球新報(一面)

●大阪所見(十)

「(4) 雑類 海産物に次ぎ重要な輸入品は牛皮泡盛漆器樟脳泥藍等の数種に過ぎず。(中略) 上記記載したる商品ハ委く将来に於て有口なる産物なりとは茲に断言すること能はずと雖ども漆器及泥藍の如きは実に本県に適當する産業にして其販路も極めて広大なるを以て他日若し完全なる改良進歩の実功を攻むるに於ては前輸出の増加を来すこと蓋し今日の比にあらざる可し。」

1898年(明治31) 7月23日 琉球新報(三面)

●泥藍の低落

「同品は山原地方より出廻り多々ありしを以て昨今大に低落に趣き居りしか過日の値段に比較すれば殆と三十銭余の低落相場を現ハすに至りたり。尤も同品ハ其産地元なる山原地方に於ては春藍大に豊作せし上に夏の製藍も収穫高例年に劣らざる模様を呈したるため漸く其値の低廉に趣たるとなん。」

1898年(明治32) 1月27日 琉球新報(二面)

●本県の藍作業

「国頭地方の特産山藍八年々藍作畑の拡張に従ひ産額次第に増加し今や一年凡そ二千万斤以上に至るへし。然るに近来価格低落し葉藍一斤五厘以下なりと云へは藍作家の困難想像に堪へず。目下の有様にて推行けは自然作換へをなすものあるべく敢て隨て産額減少せん今に於て之れか挽回策を講せされは遂に本県の藍作業ハ衰頽するに至るへし。先つ今日の如く価格の低落したる原因を取調るに第一紺地布の不捌と金融の必迫によるか如し。口覚需要供給の平を得るか為めに付藍靛を製造し輸出を凶らさるへからず東京市場の相場を聞けば上等藍靛百斤二百四五拾圓ト等百二三拾圓なりと云へり。尚當業者の参考の為め或農学者か本邦の製藍に就て説きたる一説を略記すれハ左の如し。」

本邦の重要産物の一なる藍は肥料を多く要する割合に其収穫高少なく、且近年は精良にして価も安く使用にも便益な印度藍に屈倒せられ、年々売行を減少せし結果農家に於ては到底藍作の他の農作に比して不引合なる為め次第に藍作を廃止し他の農作物に転業するものありて関東地方は勿論藍の本場たる徳島地方に於ても次第に減作傾を生し其一方に八年を追ふて印度藍の輸入増加し来り此勢を以て推せ八両一

年を待たずして我邦特有農産物たりし藍も綿花砂糖の如く衰滅するならむ(以下略)」

これらの記事からすると、明治31年4月の時点では、沖縄から大阪市場に大量に紺緋等の反布が輸出され、泥藍も沖縄の特産品として発展するであろうとの展望が見える。しかし、同年7月以降の記事では、山藍の価格の低落や、印度藍に屈せられて沖縄だけでなく徳島の阿波藍も減作に転じたこと等が報じられており、昭和30年代初頭から製藍業に陰りが見えてきたことがわかる。

おわりに

本稿は、明治に入って琉球藍が換金作物として捉えられ、無禄士族等の生業として有用な作物であった史実を踏まえ、その当時の本土の情勢を伝える『山藍實用眞書』を取りあげて時代背景の検証を試みた。また、19世紀における藍染料をめぐる社会背景については、中田成章氏の論文をもとにヨーロッパ、とくにイギリスの植民地主義と藍との関わりが深かったことを確認した。日本においては、幕末から欧州に渡航し見聞したことを実業界に生かした五代友厚が、自分の財を投げ打ってまで興した製藍業について、史料の一部を紹介した。

明治20年代前半に、蓼藍と比較しても琉球藍は優れていると評して、『山藍新書』や『山藍實用眞書』などの本が続出した。すなわち、廃藩置県以前まで、薩摩藩外への販路を閉ざされていた琉球藍が、置県後明るみに出て注目されたわけで、それゆえに沖縄でもこれを生業にする人々が急増したのであろう。当時は一大産業として発展する兆しもあったが、結局のところ、印度藍や人造染料に押されてしまった。これについて小橋川氏は、「琉球藍が全国に販売事業を展開できなかったのは、かつて薩摩藩が藍草の藩外持ち出しを禁止したことが大きな要因である(中略) 結果として、統制の廃止後も販路整備が立ち遅れ、産地の知名度を高めることが出来なかった。(中略) 琉球農夫の怠惰についても、全国的な市場の動きに対して関心を寄せることできないような状況に置かれていたことが大きな要因であり、県内の製藍業の発展を著しく妨げたものと思われる」と述べ、「結局、経済社会の大きな変動に抗しきれず製藍業

は衰退の傾向を強めた」と言及している [小橋川：2004, 34]。

しかし、筆者が本部・今帰仁・大宜味・国頭各村で製藍業に携わっていた人に話を聞いたところ、その多くは首里那覇からの寄留民で、大木のある山を自身で切り開き、重労働の続くアイ葉の生産や製藍業を担っていたのである。彼らは決して怠惰な気性ではなく、自らの手で財を築きいづれ故郷に帰るという気概で藍を作っていたと思う。そうした先人の努力と信条で、今日まで琉球藍の製藍業が引き継がれ、伝承技術が繋がっていると考えている。

藍は染料として人々の衣類を染め上げ、その時代時代の文化を築き上げてきたといっても過言ではない。世界中で藍染料をめぐる争奪戦が繰り返された歴史がある。筆者は、それを踏まえ、世界の潮流の中で沖縄の琉球藍が置かれた状況を検証している途中である。廃藩置県後の急激な社会変革により人々の営みが様変わりした時代、沖縄の染織業界の変貌も計り知れないであろう。琉球藍が県内での染織物の需用に応じて大いに用いられ、その製品が大坂市場等に出回ったと考えられるので、次は沖縄の染織物と琉球藍との関係について調べたい。

以上、明治時代初期にリュウキュウアイの栽培法や沈澱藍の製藍法が本土に伝わり、中期にかけて発展した経緯について述べた。これからも資料の発掘を続け、近現代の琉球藍の社会背景を探っていこうと思う。

<sup>1</sup> 本稿では、藍染料名の表記は基本的に漢字とし、含藍植物の和名はカタカナで表記する。

<sup>2</sup> 明治31年8月11日琉球新報2面「黒川属国頭地方開墾談(続)」記事中抜粋「藍作の根拠地たる本部山今帰仁山の如き八箒掃山となるべき場所は大概開き尽くして甲処乙処に幾分あるのみ」

<sup>3</sup> 小橋川順市『沖縄 島々の藍と染色』2004, 染織と生活社

<sup>4</sup> 国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/839897>

<sup>5</sup> 本書では「蓼分」と記されているが、藍分の誤りかと思われる。

<sup>6</sup> 本書では藻に「くすも」と振り仮名があるが、現

名称の「すくも」(染)のことだと思われる。

<sup>7</sup> 『山藍實用眞書』では、リュウキュウアイは山藍と称しているの、それに準じては山藍と表記する。

<sup>8</sup> 現静岡県裾野市中部富岡地区

<sup>9</sup> 第1回内国勸業博覧会(明治10年8月～11月)

<sup>10</sup> 現静岡県賀茂郡稲生沢村(伊豆半島南部)

<sup>11</sup> 現静岡県賀茂郡松崎町(伊豆半島西南部)

<sup>12</sup> 現静岡県賀茂郡南上村(伊豆半島南部)

<sup>13</sup> 第2回内国勸業博覧会(明治14年3月～6月)

<sup>14</sup> 中里成章「ベンガル藍一揆をめぐる(1)ーイギリス植民地主義とベンガル農民ー」1981『東洋文化研究所紀要 第83冊』を参照。

<sup>15</sup> 朝日新聞社「染料と肥料ー合成の時代へ」『週刊朝日百科 世界の歴史120-20世紀の世界1 技術石油からプラスチックへ』を参照。

<sup>16</sup> 三瓶孝子「本邦製藍業に関する若干の歴史的研究(一)」1940『社会経済史学 第10巻2号』

<sup>17</sup> 宮本又次『五代友厚伝』1981, 有斐閣

<sup>18</sup> 国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/847860pid/839897>

<sup>19</sup> 田中俊雄・田中玲子『沖縄織物の研究』1976, 紫紅社より抜粋。

「沖縄縣下諸島にては、三月或は九月中に茎葉を取り、桶に入れ、雨水に浸し、藍葛を製す。其方法は百盃樽(四斗樽)に雨水七・八分許り入れ、其中に藍葉十斤ほど浸し、兩三日を経て粕を取り出し、石灰四合五勺ほど入れ、一時間を経て、其上汁を流し、葛の沈みたるを取るべし、但し葛は藍葉十斤にて生葛一升二合五勺ほど生出するを通常とせり。」

<sup>20</sup> 田中俊雄・田中玲子 前掲書より抜粋。

「琉球其他鹿児島縣下諸島に於ける山藍の栽培法は、毎年其宿根より生ずる苗を冬季に植付け、翌年五月頃成熟の期に於て之を刈取り、更に成長するものは十月頃に至り再び之を刈取りて、二番刈の藍とす。而して其製造法は新鮮な藍草を大なるタタキ製の池に入れ、水を注入して之を醗酵せしめること凡そ一晝夜の後其藍草の残滓を抄ひ去り、液中に適量の石灰乳を加へ、能く攪拌して青藍を沈殿せしめ暫時放置して上澄の液を去り、其沈殿物を箆に入れ、泥状の儘之を販賣す。方言之れを泥藍と言う。甚だ不純な藍なり。」

<sup>21</sup> 『沖縄県統計書』明治16年～昭和15年, 沖縄県



